



倉本聰コレクション3

前略おふくろ様

PART II.....(1)

scénario
1976

倉
本
聰

倉本聰コレクション

3

前略おふく様

PART II…(1)

KURAMOTO SOH COLLECTION 3

前略おふくろ様 PARTⅡ…(1)

1983年 2 月 第 4 刷

著 者／倉本聰^{くらもとそう}◎

発 行／山村光司

発行所／株式会社理論社

東京都新宿区若松町15-6

電話(03)203-5791

振替 東京9-95736

1983 Printed in Japan／0393-91603-8924

加藤文明社印刷

倉本聰作品

前略おふくろ様

昭和51年度

芸術選奨文部大臣賞受賞

昭和51年度

ゴールデン・アロー賞受賞

前略おふくろ様
PART II
…
(1)

装画・題字

小野州一

装幀

杉浦範茂

いの章

窓のクローズアップ（夜）

格子がはまっていて中はよく見えない。

ポソポソと男の対話がきこえる。

男の声「名前は？」

サブの声「——（ムツと）片島三郎」

男の声「齡」

サブの声「二十七歳」

男の声「現住所は」

サブの声「台東区深川森下七丁目——どうしていきなり犯

人扱いするンスか」

男の声「職業は」

サブの声「頭くるスよ。ムツとしますよ」

男の声「職業」

サブの声「だってオレなんにもしてないンスから」
男の声「職業！」

カメラ少し動き、交番の小さな窓ごしに、とつつかま
っているサブの姿をとらえる。

サブ「板前です」

男（巡査）「つとめ先は」

サブ「森下町の料亭川波」

男「川波？」

サブ「ええ」

男「川波ってやあお前一流じゃないか」

サブ「——」

男「そんな一流店の板前が、あんな時間にあんな所でいっ

たい何をしたんだ」

サブ（カッとする）だから何度もいってんじゃないスカあ

すこは」

パシャッとフラッシュの閃光が光る。

あわててサブ顔をかくし、巡査はじろつとカメラのほ

うを向き、

男（手をふる）「行って行って見せ物じゃないんだから」

なお動かないカメラの視線。

男（サブに）「それで？」

サブ「(カメラから顔を犯人ふうにして)手でかくして」だから――

あすこは――今は空地だけど――一年半前までオレのつとめてた「分田上」っていう料亭のあったところで――高速道路で立退きになって今はすっかりなくなっちゃったけど」

パトカーのサイレン近づいて来て止まる。

サブ「(哀れにつづける)それでもあすこに坐つてると、昔いた板場や、帳場や鶴の間やはなれや――そういう――どういうか」

ドヤドヤと入ってくるパトカーの警官二人。

男(パツと立ち敬礼する)

警官「木場の変質者だつて？」

男「ハ。ただいま調べをしているところだ」

サブ「(猛然立って蒼白に抗議)それアないスよ！俺は、ですから」

警官「ハイハイ話はちゃんとときから」

サブなお猛然といおうとするが、中年の温厚な警官にいつもやわらかなだめられて。

語「前略おふくろ様。

オレは今変質者にされかけているので」

音楽――テーマ曲、イン。

タイトル流れて。

*

桂むき

大根の皮が紙のように、薄くみごとにむかれていく。

政吉の声「それでどうしたんだ」

サブの声「どうもこうもないスよ」

政吉の声「本署につれていかれたのか」

サブの声「――」

堤防(裏)

並んで腰を下ろし、陽だまりの中で包丁を使っている

政吉とサブ。

政吉「クククク。あのあたり出てるんだよな春ごろからずつと」

サブ「――」

政吉「アパートの干し物盗まれたり、部屋で寝てるとのぞかれたり」

サブ(ムツと剥いている)

政吉「それでお前お巡りに抵抗したって、具体的にどうい

う抵抗したんだ」

サブ「——」

政吉「え？」

ポンポン船の音が川面を通る。

サブ「抵抗なしてしないスよオレ」

政吉「抵抗したからこじれたんだろ？　かくすなバカこの」

サブ「だって——理由もろくにきかないで、いきなり署へ

来いって腕つかむンスから」

政吉「うん」

サブ「バランスくずれて倒れそうになって——体支えるた

めにつかまったンスよ」

政吉「何に」

間。

サブ「だからそういう時——」

政吉「大根」

サブ「ハイ（とってやる）何につかまったかそういう時は

オレ、考える暇なシかなかったスよ。でもその——男

のまずいところに、思わずつかまったらしいンスよ。意

識的なシじゃないスよオレほんとうに。そうしたら

おまわり急に怒りだして公務執行妨害だって」

間。

政吉「そりやお前、それも変質者って思われた原因だぞ」

サブ「でもオレほんとうに、意識的じゃないスもん」

政吉「——」

サブ「電車に乗ってていきなりゆれたら、反射的に吊り皮

につかまるじゃないスカ」

光子「（とんでくる）サブちゃん！」

サブ「ハイ！」

光子「おかみさん。呼んでる」

政吉「話ついたンスか」

光子「（ニヤリ）がんばっておいでよ変質者」

ドンと肩たたたく。

語「前略おふくろ様」

廊下

サブ、仲居頭さきとすれちがう。さき、ニヤリと肩た

たき、

さき「しっかり変質者」

サブ「——」

語「前略、おふくろ様」

別の廊下（かやの部屋の前）

サブ、膝をつく。

サブ「サブです」

かやの声「どうぞ」

サブ「入ります」

かやの部屋

サブ入る。

お茶をいれているかや。

その前にかしこまっている昨夜の若い巡査と署の偉い人。

サブ——何となく頭を下げ、そこに坐る。
間。

偉い人「（苦笑）だからまアあれですわ女将さん。昨夜のこととはとにかく彼（と若い巡査をこなし）のほうも、まアちよつと勇み足もあつたようだし——たしかにまアいわれれば昔つとめてた店の跡を見なくなるっていう気持ちもわかるし」

かや「お茶どうぞ」

偉い人「イヤこりやどうも（若い巡査に）いただき。ここのお茶おいしいんだ」

若い男「——」

偉い人「（すすって）何でスよコノ、昔いた家がとりこわされるっていうのは——私も経験ありますがね、やつぱり何たつて悲しいもンで」

かや「——」

偉い人「片島君はそちらに何年」

サブ「——五年いました」

偉い人「五年かア。五年つていや大した長さですもんね」

かや「アノネ」

偉い人「ハイ」

かや「課長さんのお話はよくわかりましたけど、とにかく昨夜のお話は一方的にそちらがよくないと思うンですね」

偉い人「いやまア、ですから彼も職務で」

かや「あのネ」

偉い人「——ハイ」

かや「たとえばね」

偉い人「——ハイ」

かや、ことばを探す。

かや「たとえばホラ、ロッキードでいろんな方が——田中さんや大久保さんがつかまりますでしょう？」

偉い人「ハイ」

かや「つかまるとその日から、さんが突然とれるわけね」

偉い人「ハイ」

かや「新聞やテレビの報道も田中や大久保に急になります

でしょ？ アレあの私——何となく個人的にイヤなわ

けネ」

偉い人「ハア」

かや「あなた、何となくイヤじゃありません？」

偉い人「ハアまアしかし罪を犯しますと」

かや「でもいやじゃない？」

偉い人「ハア」

かや「いやでしょう？」

偉い人「ウーン」

間。

かや「そちらの方さつきからうかがつてると、片島、片島

ってサンつけないのよね」

サブ「アイヤ」

偉い人「それはスね」

かや「罪人かどうかまだわかんないのに、うかがつてると

サンヌキなのね」

偉い人「(若い男に) 才前」

かや「それ私ちよつとこだわるのね」

偉い人「イヤ」

かや「そのこと謝っていただきたいのネ」

偉い人「いや」

若い男「イヤ自分は謝らんス」

偉い人「イヤ君は待て」

若い男「自分はあくまで不審なものを」

偉い人「ちよつと待て」

かや「次長さん」

偉い人「イヤちよつと待って」

若い男「自分は謝まる気持もないし、はっきりいつてまだ

この男がほんとうに変質者であるかないかは」

偉い人「待ってっというンだコラ」

かや「変質者かどうかまだわかってないンでしょ？」

偉い人「イヤ」

サブ「おかみさんアノ」

かや「私だつて自分とこの従業員を絶対呼捨てになンかし

ないわけネ」

サブ「アノ、オレほんとうにもういいスから」

偉い人「(同時に) いや、とにかくちよつと」

若い男「自分はあくまで」

かや「うちにも警察の偉い方みえますし」
サフ「おかみさんほんとうに」

かや「それに財界や政界の方だつて」

偉い人「おかみさん、私は」

若い男「自分は正しいとあくまで信じて」

偉い人「(叫ぶ) お前は黙つとれッ」

若い男「(叫び返す) なぜでありますかッ」

偉い人「オレは次長だッ」

若い男「わかつておりますッ。しかし」

偉い人「しかしじゃないッ」

若い男「しかし、われわれ警察官は」

語「前略おふくろ様」

争っている巡査とその上司。

語「分田上がつぶれて一年半。オレは今でも深川にいます」

音楽——テーマ曲、イン。

料亭「川波」表

仲居のしのぶが水をまいている。

料亭「川波」の看板。

語「ここは川波という料亭です」

板場

秀次と政吉働いている。

語「秀次先輩が誘ってくれて、政吉さんと俺とかすみちや

んが、今この店で働いています」

皿を運んでくるかすみ。

かやの部屋

警察官たちの争いを前に、静かに茶をすすっているかや。

語「ここのおかみさんは竹内かやさんといい、もとは深川

の勝次という名でちよつと鳴らしていた芸者さんだつ

たそうです」

かや手をのばし、もめている次長の洋服のゴミをとつ

てやる。

語「時々今日たくカアツとしますが、いつもは気のいい

うっかりした人で、古くからいる仲居のおさきさんや

ふさこさんに完全に頭をおさえられています。

いや、

おかみさんだけじゃありません」

控えの間

キリリツと帯しめる仲居たち。さき、ふさ、光子、かすみ、しのぶ。

語「この仲居たちはすごいのです。とくに上三人が恐ろしく、何しろ前いた板前は次々におびえて逃げたという噂で」

ふさ「しのぶちゃん」

しのぶ「ハイ」

ふさ「帯ダメ。もう一度やり直し」

しのぶ「ハイ」

時計

五時半を廻っている。

音楽——消えて。

板場

秀次「神様とお嬢さんあがったよッ」

政吉「ハイイッ。神様とお嬢さんあがりッ」

神棚用の小さな食事と、もう一つこっちは人間用の食事。その人間用の運搬のために、手早く煮方を中断するサブ。

語「この家にはもう一人、お嬢さんがいます」

廊下

そろそろと膳を運んで行くサブ。

語「冬子さんといつてほんとうは高校三年なのですが、登校拒否症という一種の病気で学校へはほとんど行っていないません」

渡り廊下

そこだけぞうりをはく地上の通路である。

語「ちょっと、不思議な娘さんですけど、オレはなぜだか気に入られており」

離れ（冬子の部屋の前）

サブその前にやってくる。

声をかけようとした時、中から、

冬子の声「お兄ちゃん？」

サブ「——ハイ」

冬子の声「どうぞ」

サブ「ハイ」

同・内

サブ入る。

冬子「机で本を読んでいる。」

サブ「〔配膳しつつ〕勉強ですか?」

冬子「無視。読んでいる」

サブ「ごはんこ置きます。さめないうちにあがつてくだ

さい」

冬子、急に本を閉じ、ごはんの前に勢いよく坐る。大

きな目でじつとサブをみつめ、

冬子「お兄ちゃん、私絶対いると思う」

サブ「アヤアいないスよ。こないだもいったじやないでス

か」

冬子「いる」

サブ「いないスよ。そりゃア前にはたしかにかすみちゃん

と」

冬子「何の話してるの?」

サブ「ハ?」

冬子「——」

サブ「アヤア——!」

冬子「——」

サブ「恋人の話じゃないンスか」

冬子「——ヒューマノイドの話」

サブ。

サブ「何スカソノ、ヒューマノヒューマノ——」

冬子「宇宙人」

サブ。

冬子「UFOに乗って遠くから来る人」

間。

サブ「じゃアノオレ忙しくなりますから」

冬子「ちよつとだけいいでしょう?」

サブ「ハア、でも、しかし」

冬子「アメリカなんかではどんどん出てるのよネ、空飛ぶ

円盤に乗ってきて」

サブ「やっぱりオレアノすぐ行かないと。じゃ（行く）」

冬子「お兄ちゃん」

サブ「ハイ」

冬子「日曜日お祭りつれてってくれるンでしょう?」

サブ「——ハイ」

サブ逃げる。その背中へ、

冬子「お兄ちゃん」

サブ「ハイ」

冬子「おいしい、この煮物」

サブ「（去りつつ）ハイ」

音楽——軽快にイン。

廊下

仲居たちの足、忙しくなりはじめる。

その中を急ぎ板場へもどるサブ。

板場の喧騒、しのびこむ。

ふさの声「三番さんお入りよッ」

政吉の声「ハイ三番さんお二人お入りッ」

板場

戦場。

光子「(とび込む) 五番さんつき出し願いますッ」

政吉「五番さんつき出し」

サブ「二番の煮物あがってます」

光子「ハイ二番! しのぶちゃん!」

しのぶ「ハイッ」

さき「(とび込む) 萩の間お二人さんお着きですッ」

政吉「ハイよッ。萩の間お二人さん」

かすみ「お銚子二本にビール三本! それからさっきの六

番さん、至急願いますッ」

さき「萩の間おひと方入れ歯だからねッ」

政吉「あいよッ」

さき「秀さんわかりましたッ?」

秀次「アイヨ」

政吉「萩の間お一人入れ歯お一人普通食!」

しのぶ「田上建設さんお着きですッ」

さき「何人ッ?」

しのぶ「お二人さんです!」

さき「桔梗の間五人中お二人さんお着きッ」

政吉「わかったよッ」

かや「(とび込む) 三番さんお二人。アノ——アノ——ア

ノ——忘れた(とび出す)」

さき「おかみさん、邪魔だからこっち来ないでください!」

秀次「一番の焼物あがったよ」

政吉「一番あがりッ」

かや「(またとび込む) 三番さんわかった! ホラ——ホラ

——ホラ——(自ら走りだす) お手もといつてない」

ふさ「(とび込む) 渡辺土木さん——おかみさんこんなところ、

うろうろしないでッ」

かや「ハイッ(箸をつかんで走り去る)」

ふさ「渡辺土木さん三名さん追加」

語「板場はどこも板場です」

働くサブ。

語「来る来るといつて未だに来ない見習いの人間が足りないの、今のところえらく忙しいけど、しかし、やっぱりオレにとってはこの時間は何よりも生きてる気がして」

かすみ「(半ベソ) 六番さんまだですか?」

しのぶ「二番さんおしんこ追加願います!」

政吉「とってけ! 冷蔵庫ッ」

しのぶ「ハイッ」

光子「五番さんつき出しまだなのッ?」

政吉「ホレあがったいいッ!!」

かすみ「(さらに半ベソ) 六番さんまだなの?」

政吉「オレ次はッ」

サブ「一番さん!」

かすみ「(泣きかけて) 六番が先だ」

政吉「一番きゅうり抜き? 何だこりゃ」

しのぶ「きゅうりダメだって」

政吉「ハイハイきゅうり抜きのきゅうりもみッ」

かすみ「(とうとう泣きだす) 六番さつきからいつてのに
イ」

サブ「(叫ぶ) ガタガタいうなッ」

さき「(入る) 何だいいたいその態度は」

政吉「(叫ぶ) 人手が足らないンだよこっちア人手がッ」

ふさ「(入る) 何だいアンタその言い方は」

さき「文句があったらきこつか政さん」

ふさ「ちよつとあんな態度大きいンじゃないの?」

秀次「わかったわかった。六番だろ。ホラ」

かすみ「(泣きながら) アリガトウ(去る)」

かや「(とび込む) 萩の間さんホラこないだのまた——ホラ

——ホラ——ホラ——ホラ——

ふさ「わかったからわかったからこつち来ないで」

かや「(押し出されつつ) ホラ——ホラ——ホラ——」

ふさ「わかったからわかったから」

さき「萩の間さん、例の」

秀次「やってます」

音楽——ぐいぐいと盛りあがって夜へ。

門燈「川波」

灯が消える。

どこかでチャルメラの音がきこえる。

板場